

鷹巣誠一・小川政弘作 「墮胎」

効果音 (教室のガヤ)

清水 おーい、来たぞー！

効果音 (イスの音。ガヤやむ)

桑田雄二 起立。礼。

先生 えーと、今日は7月10日か。出席を取るぞ。静かにしろ。青柳。(以下、生徒「はい」と答える)石塚、宇田川、榎本、太田、加藤、桑田。

桑田 はい。

先生 清水

清水 はい。

先生 (女子に入る)秋山、内田、川村(FO)

清水 おい桑田、今日も神田のやつ来てないぞ。

桑田 ああ。どうしたんだろうなあ。

先生 (FI)神田、神田敬子。…また休みか。しょうがないな。だれか知ってる者はいないか？

生徒たち (口々に)知りません。

先生 そうか。まあいい。あとで電話してみよう。

ナレーション ここは青春高校の3年生の教室。神田敬子は、2、3日前から学校を休んでいるのです。その日の放課後――。

清水 なあ、桑田。どうもおかしい。神田のやつ、家にも帰ってないらしいぜ。

桑田 ああ。

清水 なんだお前、知ってたのか？

桑田 まあな。

清水 そうか。お前、あいつのこと好きだったもんな。それで、どこにいるか知ってたんだろ？

桑田 ああ。実は、おとといの夜、教会の帰りに会ったんだよ。すごく深刻な顔をしてて…。

音楽 (ブリッジ 回想)

桑田 やあ、神田さんじゃないか。どうしたんだい、こんなに夜遅く？

神田敬子 (驚いて)桑田君！…ほっといて。(足早に立ち去ろうとする。)

桑田 うるさいわね。離してよ！

福島 恵子、何してんのよ。行っちゃうわよ。

神田 今行くわ。じゃあね。

桑田 あ、神田さん。

音楽 (ブリッジ 回想終わり)

桑田 …というわけなんだ。

清水 ふーん。

桑田 あの時、どうもおかしいと思ってただけだけど、あれからずっと学校へも来てないだろ。だからきつとあの福島っていう先輩のところだと思うんだ。

清水 お前、その人 知ってるのか？

桑田 ああ。一度彼女から紹介されたことがあるから。

清水 ところで、お前が思うに、彼女の家出は何が原因だと思う？

桑田 うーん。実は彼女には付き合っていた人がいたんだよ。大学生で村中とかいう。彼女、どうも最近はおまくいってないみたいなんだ。それでおとといのあの態度だろ。これは絶対にそいつと何かあったんじゃないかと思うんだ。

清水 うん、それは十分に考えられるぞ。お前、その福島とかいう人の家、知ってたろ？ 今から押しかけようぜ。心配でしょうがないんだろ。おれもついていってやるからさ。

桑田 うん。じゃあ頼むよ。

ナレーション こうして彼ら2人は、その先輩のアパートを訪ねました。

効果音 (玄関の呼び鈴)

福島 はい。

効果音 (ドアの開く音)

桑田 こんにちは。

福島 あら、あなたは、えーと…。

桑田 桑田です。

福島 そうそう、思い出したわ。で、なんの用？

桑田 実は…、神田さんがここにいるんじゃないかと思って。

福島 (驚いて) え？ 彼女いないわよ。帰って。

桑田 待ってください。いることは分かってるんです。会わせてください。

清水 そうです。こいつ、彼女のことが好きなんです。それで心配で。

福島 それならなおさらダメよ。

桑田 じゃあいるんですね？

清水 お願いします。会わせてください。

福島 (ためらって) 今はいないわ。まあ、上がんなさいよ。

効果音 (ドアの閉まる音)

福島 じゃあ、隠さずに言うわね。実は…彼女、妊娠してるのよ。

桑田 え？

福島 村中君、知ってるでしょ？

桑田 ええ。

福島 彼といろいろあったらしいの。ところがね、彼ったら、彼女に子供ができたことを知ると、「墮ろせ」って言うらしいの。そして自分はどっかへ行っちゃって、姿も見せないの。要するに捨てられたのね。そうこうしているうちにもう4か月になっちゃって。それでね。彼女、あんな人の子供は絶対に産めないって決心して、アルバイトしてお金つかったの。今さっき、医者に行ったわ。

桑田 え、医者に?! ダメだ、そりゃいけない! ど、どこですか、そのお医者さんは？

福島 えーと、なんていったかしら。そう、何かの時のためって紙に書いていったみたいね。えーと…。

桑田 早く、その紙を! 取り返しのつかないことになるんだ。早く!

ナレーション 桑田君は、その紙をわしづかみにすると、飛び出しました。

効果音 (街中の雑踏。タクシー。)

桑田 運転手さん、もっと早く。一人の人間の命がかかってるんです。

効果音 (病室のドアの開く音)

看護婦 神田さん、どうぞ。

桑田 (息せき切って) 神田さん！

神田 桑田君…。どうしてここへ？

桑田 福島さんとこへ行って話は聞いた。神田さん、ダメだ、こんなことしちゃ。僕と一緒に来てくれないか。

神田 ダメよ。わたしもう決めたんだから。自分のやったことは自分で始末するわ。

桑田 いけない。理由はどうあれ、こんなことしちゃいけない。

神田 ほっといて！ あなたに関係ないでしょ。

桑田 いや、ある。大いにある。

神田 あなたに何ができるって言うの？ 同情なんてたくさん！ 放して。放してってば！

桑田 バカ！（ピシヤリと平手打ちの音）

ナレーション 桑田君は、あつけにとられている人々を後ろに、神田さんの体を抱えるように医院を出ると、近くの喫茶店に入りました。

効果音 (喫茶店内)

神田 さっきは取り乱してごめんなさい。桑田君、あなた、さっき、わたしのこと「関係ある」って言ったわね。どうして？…ねえ、どうしてなの？

桑田 ——君のこと、好きなんだ。

神田 …桑田君…。

桑田 ずっと前から、君のこと気になっていたんだ。特にこのごろの君の様子や、この間の夜の君を見て、何かあると思って祈っていたんだ。

神田 祈ってた？ あなたが、わたしのことを？

桑田 矢も盾もたまらず清水と一緒に福島さんちへ行って君のことを聞くと、夢中になって飛び出して、気がついたら君をあそこから連れ出した。…今僕は自分の気持ちをはっきり君に言える。神田さん、僕には君の苦しみを代わってやることはできない。でも、なんとか君の力になりたいんだ。

神田 でも、わたし、妊娠してるのよ。相手の男はそのことを知ると、さっさと離れていったわ。残ったわたしはどうするの？ 始末するしかないじゃない。だれでもやってることだわ。

桑田 違う。違うんだ。

神田 じゃあ一体どうしろって言うの？

桑田 どうしたらいいのか、僕には分からない。でもこれだけは聞いてほしい。君のおなかの中の命を摘み取っちゃいけない、どんなことがあっても。それは“殺人”だよ。

神田 殺、…人？

桑田 お願いだ、神田さん。今君がやろうとしていることをよく考えてほしいんだ。自分が犯した過ちを清算するために、神様から与えられた命を犠牲にすることは、だれにも許されちゃいけないんだよ。

神田 神様に与えられた、命…？

桑田 そうさ。神様だよ。君の中にいる小さな命は、神様によって与えられたんだ。その命を人間が勝手に殺してはダメなんだ。たとえそれが“罪の子”でもだ。君は生かされているんだよ、神様に。だから、神様に与えられた命を殺すということは、最

大の罪だ。君のこの試練も、すべて“神様のなされた業”だと思うんだ。

神田 神様の業？ だったらどうしてわたしをこんな目に遭わせるの？ 神様は愛じゃなかったの？

桑田 そうだよ。神様は君を愛してる。神田さん、厳しいかもしれないけど、自分のやったことを神様のせいにしちゃいけないよ。神様は、今度のことが君に起こるのを許された。だとしたら、そこには神様のご計画があると思うんだ。それは、なんて言うか、“命の重さ”を僕たちに知らせるためじゃないのかな。そして君に、その命を与えられた神様の愛を知らせるためじゃないのかな。

神田 “命の重さ”…“神様の愛”…。(ワツと泣き出す)わたし、わたし、大変なことしようとしてたのね。でも、どうしたらいいの？ ねえ、桑田君、助けて。どうしたらいいの、わたし？(泣き続ける)

桑田 神田さん、神様を信じるんだ。神様は、君のためにイエス様を十字架に付けて罪の身代わりにしてくださいました。イエス様を信じるときに、君の罪は赦^{ゆる}されるんだ。(敬子、更に泣きじゃくる)ごめん、何もできなくて。でも、僕自身も、どうしようもない罪だらけの生活から、イエス様によって救われた。僕にできることは、君をそのイエス様のもとに連れていくことだけだ。

神田 本当に、神様は赦してくださいさるの？ 信じていいの、桑田君？

桑田 もちろんだよ。さあ、これからどうするか、牧師先生のところへ相談に行こう。君のご両親にもね。神様は、信じる者に最善をしてくださるんだ。

ナレーション 敬子は、桑田君の言葉に素直にうなずいて立ち上がりました。教会への道すがら、2人の心には、これから彼女が背負わねばならないいろいろな重荷が次々と浮かんでくるのでした。けれども、神様が救ってくださった命なら、神様が育ててくださる、神様が最善をなしてくださるといふ、一筋の望みを、敬子はしっかりと握りしめていました――。

<完>